

漢詩：文苑

著者	山内，正瞭，古川，高次，愛日居主人
雑誌名	龍南會雜誌
巻	48
ページ	47-50
発行年	1896-06-28
URL	http://hdl.handle.net/2298/4973

濁にも染まぬはちすの匂ひかな
寝とびれてのみの數よむ旅寝かな
松風のたえぬ坐敷や竹ふじん
飼猫に夢やぶられぬ竹婦人
古池に水のうごかぬあつさかな
暑き日や兒等は 大の字 十文字

俳句九首

梓 水 川

夕立や風呂にかぶせる破傘
蜘蛛盲壁より筆に巢を張れり
川どしは日の照りぬけり蔭涼し
卵の花に月の出けり岸のふね
梅檀と桐の葉どしに朝日かな
螢とて葉どしの星を卯月闇
つるべ汲む袂に鳴くや雨蛙
雨暗し螢の獨りどこにとふ
年とれば花より夏の木蔭かな

登山

一路羊腸坂行吟 綠葉間 朝雲粧媚態 暮雨洗孱顔 松影千秋水 鶯聲四月山 回頭人世遠

烟圃 山内正 瞭

竹溪先生曰 鮮麗高華，如芙蓉出水，鶯聲四月山，五字絕妙。

全題

紫藤花底杜鵑紅，夏始春餘芳一叢。初識深山時候，暮流鶯四月語，初工。

竹溪先生曰 一氣呵成，妙在自然。

散策

春風穀雨夕晴時，那箇追暄杖一枝。麥綠菜黃桃李鋪，看々何處不新詩。

竹溪先生曰 似無何趣味而妙，是宋人獨擅。

全題

公道春風處處園，朱門何必勝衡門。李桃紅白麥畦綠，斜日林間鳥語暄。

竹溪先生曰 即景即目，使人有身在其境之思。

上巳

上巳佳辰值好晴，鳥歌花舞惹吟情。晉時會稽山陰會，果否風光今日清。

竹溪先生曰 風調諧適。

某園所見

鏡蕉尾接老龍松，萬綠陰中涼。午風愛個春光，猶宛在杜鵑聲裡。一株紅。

竹溪先生曰 此則風流之筆，尤為斬新，正是清人之佳處。

初夏出遊

新樹陰森綠葉齊，午天猶聽杜鵑啼。苔封古塚沒文字，草滿荒村輕馬蹄。凝望偏憐遙黛淡。

回頭不覺夕陽低，移情最是無塵地。架屋何時卜小栖。

竹磯先生曰 兩聯精妙、

偶成

蠻風只恐惱人深，眼色移來染赤心。獨有東方君子國，波濤萬里遠相欽。

夏日水軒畫贊

樹々清陰合，山々遮夕陽。虛堂人不住，吹滿畫欄涼。

竹磯先生曰 吹滿畫欄涼五字，絕去筆墨畦畛，直造入平到之境。

竹屋書屋

十畝渭南綠，移來滿屋前。書聲與鳥語，相和日暄然。

竹磯先生曰 五言長城、

寄友人

古川高次

節物推遷如急流，別來已過幾春秋。知君若識相思切，一片寫真付遠郵。

瀑布

懸泉直落自青天，噴沫四飛黯若煙。霹靂聲中暑威盡，一溪風雨氣蕭然。

夏夜懷鄉

愛日居主人

空數歸期不就眠，天涯游子有誰憐。松間一片蒼々月，萬里愁心付杜鵑。

評云不就眠之字孕出末句佳作

書懷

濛々霖雨夜闌時、池畔蛙鳴簷滴垂、孤夢不成晴燈下、相思千里客心馳、

森川松莊養病在郷賦以贈

勃々雄心暫不休、沈吟床上使人愁、靜中日月須安養、人世蹉跎何足憂、

批評

睨天窟主人の駁論を讀む(承前) 楮村學人

第二、文學は平等的なり。(下)

學問不成立論を唱ふる主人に向て、文學の平等的なるを云ふは、頗る成人なげなき仕方なれども、是れ或は主人の頑然として確守さるゝ處なるべければ、敢て、更らに予をして論ずる所あらしめよ、夫れ正當なる文學の平等的なるは予が言を俟たず。文學を差別的なりと云ふは、即ち文學不成立論となるを知らずや、文學は固より「サイエンス」にはわらず。コルレッヂが其詩論中に、

……that poetry, or rather a poem, is a species of composition, opposed to science.

と云へるは明らかに、「サイエンス」と文學との區別を認めたるを見るに足る。されば予は固より、文學をば「サイエンス」とは認めざれども、文學も亦更に、「サイエンス」の如く平等的のものたることを信するものなり。足下は文學は差別的なるが故に價値ありと云ふ。是れ果して何たる言ぞや。文學にして平等的ならずば、文學の文學たる所何處にかある。足下は曰く。

人は現象界に棲息するものなり。時間と空間とに制せられて、あらゆる關係の下に生活するものなり。(中略)人既に差別界を離るゝ能はず。故に人の思想夫自身も亦未だ平等的(こは主人は絶對義の平等に取れり)なるも能はざるは、古來の思想界を點檢するものと必ず發見する所ならむ。